

【自著紹介】 Jonathan Dil,

*Haruki Murakami and the Search for Self-Therapy:*

*Stories from the Second Basement*

(Bloomsbury Academic, 2022 年)



村上春樹は、小説を書き始めたのは自己治療のためだと語っている。あまり語ってこなかったのは、何のために自己治療が必要だったのかということである。*Haruki Murakami and the Search for Self-therapy: Stories from the Second Basement* (『村上春樹と自己治療の探求：第二の地下室からの物語』)は 2022 年にブルームズベリー・アカデミック社から SOAS Studies in Modern and Contemporary Japan シリーズの一環として出版された。この本は、上記の村上の主張を真摯に受け止め、彼がなぜ小説を書き始めたのか、そして、その書くという治療的動機を、いかにして何百万人もの人々の心を捉える文学的小説へと変化させたのかを理解しようとするものである。本書は、村上の最初の 14 の小説をそれぞれ詳細に読み解き、F・スコット・フィッツジェラルド、レイモンド・チャンドラー、レイモンド・カーヴァーの文学、フリードリヒ・ニーチェの哲学、カール・ユングの精神分析思想など、これらの作品を形成する上で重要な影響を受けたいくつかの作品の役割を説明している。村上は、精神分析的な影響よりも、上記の文学的、哲学的な影響についてよりオープンに語っているが、ユングが村上の小説に深い影響を与えていることは、本書の中で強く主張されている。

本書の序章は、そもそもなぜ村上が自己治療を必要としたのかという疑問から始まり、2 つの伝記的な答えを提示している。すなわち、村上の両親（特に父親）との不仲と、かつての恋人の自殺である。筆者はインタビューや二次資料を活用し、村上の治療的小説の始まりについて新しい情報と新鮮な視点を提供している。序章では、村上春樹がどのように小説を書いているのかというテーマについて考察し、彼の方法は告白によって得られるカタルシスを求めるのではなく、無意識の謎—村上は人間の心に隠された第二の地下室と表現している—に依拠するものであると説明している。村上は自己治療の手段として小説を書き始めたが、厳密に言えば伝記小説は書いていない。その代わりに、彼は執筆過程における自発性を何よりも大切にしており、自分の物語がどこから来たのかよく理解していないと主張している。従って、村上の小説

を進化する治療プロジェクトとして読むことは一筋縄ではいかず、作家とその無意識、そして作品との関係についての問いに思慮深く関わる必要がある。序章では、このような問いに取り組み、村上の小説が彼のトラウマとの関連でどのように読まれるべきかを理解するための幅広い枠組みを提供することを目指す。

本書の5つの章に目を移すと、村上の小説に織り込まれている4つの治療的なテーマに焦点が当てられていることがわかる。最初のテーマは、村上の初期の小説で特に顕著であり、メランコリアから喪に服すまでの主人公の旅を描いている。本書の第1章と第2章では、このテーマに関するフロイトの著作からヒントを得て、初期の主人公たちのメランコリアと、彼らが無意識の介入を通して、より健全な喪のプロセスへの回帰をどのように求めているかを考察している。村上春樹の小説のこの側面は、序章で取り上げた元恋人の死と関連づけることができる。

第2の治療的なテーマは、世代間のトラウマの本質を探り、村上の小説が自己犠牲の象徴的行為を通していかにトラウマを癒そうとしているかを考察するものである。この治療的なテーマは、村上の3作目『羊をめぐる冒険』（1982年）で初めて現れ、8作目『ねじまき鳥クロニクル』（1994-1995年）で頂点に達する。この治療的なテーマは、第二次世界大戦の帰還兵であり、戦時中の体験から明らかにトラウマを抱えていた父親と村上の関係に関連づけることができる。

3つ目の治療的なテーマは、愛着理論からアイデアを借りて、村上の回避的な主人公たちが他者との距離を克服し、愛を見つけようとする方法に注目している。これは村上の作品全体に見られるテーマだが、大きな突破口は『1Q84』（2009-2010年）と『騎士団長殺し』（2017年）に見られる。この治療的なテーマは、村上の両親との複雑な関係とも関連している。

第4の治療的テーマは、ニヒリズムへの応答としてのユングの個性化(individuation)である。これもまた、村上春樹の最初の14の小説のそれぞれに見られるテーマであるが、村上春樹の14番目の小説である『騎士団長殺し』では特に強く表現されている。ピーター・ホーマンズの考えを借りて、本書は、個性化とは喪から成長するプロセスであり、自己治療を個人的なトラウマの克服を超えて、個人的、さらには精神的な成長と発達の領域へと導く試みであると論じている。本書の結論は、セルフ・セラピーの目的は何なのか、村上を書くことによって救いを見出したと言えるのか、というこの問いに立ち戻る。

【ジョナサン・ディル（日本文学）】